

作物名：いちご
病害虫名：黒斑病（病原：*Alternaria alternata*）

1 被害の特徴と診断のポイント

- 葉、葉柄、がくに発生し、葉では5～8mmの黒褐色の輪紋を生じ、中心部は灰褐色を呈する。葉柄には軸を取り巻いて黒色の病斑を生じ、やがてその葉は枯死する。条件が良いと病斑上にはいずれもすす状のかびがみられる。



写真1 葉の病斑

2 伝染源・伝染方法

- 本病菌は被害植物上の分生子及び菌糸で越冬し、夏秋期に分生子の飛散によって伝染する。

3 発病しやすい条件

- 本病菌は糸状菌の一種で不完全菌類に属し、菌の生育適温は25℃である。多湿条件で多量に分生子を形成するため、降雨が多いと多発する。
- 本病はこれまで品種「盛岡16号」に特異的に発生し、その他の品種では発生が確認されていなかった。四季成り性品種の「すすあかね」が罹病性であり、宮城県では2013年に夏秋期の施設栽培で発生が確認されている。

4 防除方法

- 被害莖葉上に形成された分生子が二次伝染源となるので、発病葉はみつけしだい取り除き、ほ場外に持ち出し処分する。
- 防除薬剤はロブラール水和剤の登録がある（平成27年3月18日現在）。

5 出典

(1) 参考文献

- 日本植物病害大辞典（全農教）
- いちご病害虫の見分け方（日本植物防疫協会）

(2) 写真

- 宮城県病害虫防除所撮影



写真2 葉柄の病斑



写真3 がくの病斑